
カタチをもたない心

フーリエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カタチをもたない心

【Nコード】

N7766Y

【作者名】

フリーエ

【あらすじ】

道徳と背徳。

大切な人がいるのに、わかっていながらも恋心で乱れてしまう。衝動的な一線を越えたところにある世界とは？

はじまり

部屋は、時折青光りする稲妻に照らされていた。

ずぶ濡れの二人は、髪や衣服から水滴を滴らせながら部屋のバスタオルで体を拭いていた。

美穂は、なぜこんな状況になってしまったのか？ドキドキしながら考えていた。

「チーフ、大丈夫ですか？」秀也が声をかけた。

「あつ、今は、平気。佐藤さんと途中で会えてよかった。一人で道に迷ったときはどうしようかとおもった。ホント助かったよ。」

「いやーあそこでペンションのオーナーに会わなかったら、かなり悲惨でしたよ。」

「僕はすっかり携帯忘れるし、チーフのは電源切れ。参りましたよ。充電器とかあるのかな？」

「そうね。無線と電話が今使えないって言ってたからね。こんな山奥で最新型のスマホの充電器は、ないんじゃない？」

「オーナーが、もう少し雨がましになったら車出すって言ってたから、それ乗せてもらいましょう。」

「そうしよう。」

・・・4時間前・・・

新人社員研修に引率で美穂と秀也は、講師を出迎えたあと、2日間

缶詰の講習が始まったと同時に引率業務から一時解放され、自由時間になった。美穂は、広大な研修施設を完備したホテルの敷地内を散歩していた。しかし、どこかで標識がまちがっていたのか？戻れなくなってしまうた。

丁度その頃、秀也も敷地内のテニスコートで同僚と汗を流したあと、フロントで敷地の外れに露天風呂があると聞き、そこを目指して歩いていたら道に迷ってしまった。

美穂は、気付けば後ろも前も草むらでどこがどっちだか？わからない状況に追い込まれていた。携帯持っているから大丈夫とたかをくくっていたが、充電切れしてしまっている。

小雨が降りだし、気温が下がり始め、究極に心細くなっていた。

そんな矢先に背後の草むらがガサガサと音を立て、一瞬恐怖を感じて振り返ると、そこには浅黒く焼けた長身の佐藤秀也が現れた。

「どっとうしたの？佐藤くん」

「チーフ？何してんすか？」

そこから、小一時間歩いたところで、雨が土砂降りになり木陰で震えているところで

山小屋のオーナーに出会った。

オーナーは、毎日このあたりを散歩しているらしかった。

静かな老人で、二人に山小屋の一室を提供し、暖を取るよう勧めてくれた。

・・・山小屋・・・

「チーフ。シャワー先使ってください」

「ありがとう。」

オーナーが置いていってくれた白いガウンを一つ手にとりシャワー室へ向かった。

シャワーを浴びながら、普段の自分では考えられないくらいドキドキしていた。

何があるってわけでもないと言い聞かせても、しょうがない程胸が高まる。

さっきまで遭難しそうだったから忘れていたが、転職してきた佐藤が気になっていたのだ。

もちろん、夫のことは愛しているし一番大事だと思っている。

しかし、惹かれてしまうのだからしょうがない。

一種の熱病だと思ってほぼ気持ちを見殺ししようとしていた。

8歳も上だし・・・結婚しちゃってるし・・・しょうがない奴だな私。。。

シャワー室の洗面台で鏡に映る自分を見る。

熱いシャワーが体温を戻してくれたのか、頬に赤みが少し差している。

紅潮しているのか唇も赤くなっている。

ガウンをきてみると、少し小さめなのか胸の谷間がどうしても隠しきれない。

バスタオルをたたんで胸のあたりを隠すことにした。

「佐藤くん。どうぞ。」

大き目のストーブに暖を取ってベッドのへりに座って待っていた秀也に声をかける。

「あつ。どうも」佐藤は、ガウンをとると、即座にシャワー室へ行った。

「ストーブの周りの格子にシャツやズボンをかけて乾かすことにした。

ブラもショーツも男性の目があるとは言え、干さなければびしょびしょである。気にしてられない。

本当に黒の普通の下着で良かったと変なところで安堵している自分が少しおかしかった。

干し終わると、ベッドの毛布をかぶってストーブに手をかざしていた。

少し疲れたなと思っていたら・・・眠気が差してきた。

「チーフ？チーフ？」美穂は、ハツとすると佐藤が、自分の方を覗き込んでいたので驚いた。

毛布をかぶったまま、ベッドに横になってしまっていた。

美穂が、起き上がるうと毛布をめくった瞬間微妙にはだけたガウン姿をみて、

佐藤は、真っ赤になった。

「・・・。」美穂も視線に気付き、自分をみていると全部出ているわけではないのだが、胸の谷間が今にもでそうになり、太ももが少しはだけた状態だった。

「あつ。ごめん。ごめん。」そそくさと身を整えた。

「あつ。その・・・すみません。」

「佐藤君がなぜあやまるの？悪いことしようとしてた？」いたずらっぽく言ってみた。

「そんなことありません！」まじめな佐藤は、頬を紅潮させて、言った。

「ごめん。からかっただけ。怒った？」

「いえ。別に」視線が合う。

美穂も場の雰囲気を変えようと妙に明るい声で「そうだ、ストーブに洋服掛けるといいよ。」

「そっ、そうですね。」

無言の中、土砂降りの雨音だけが2人だけの部屋に流れる。

ポットのお湯でコーヒーを入れることにした。

サイドボードの棚からインスタントコーヒーの瓶をとり

「これってスプーン2杯くらいだっけ？」とか話していたら

佐藤が隣に立ち、マグカップだからもう少し多い方がいいかもと手をだしてきた。

長身の佐藤の目線からだど、美穂の胸元はかなり際どく見えていた。美穂の方を見てはいけないと視線を不自然にずらしていた。

「佐藤君、ねえ、佐藤君？お砂糖とクリープ入れる？」と聞かれて、美穂の方をちらつとみると白い大きな胸が目飛び込んできた。

下半身にジワリと血流が廻った。

「入れます……。」

美穂が、「はい。どう……」どうぞと言う前に秀也は、これ以上、余計に昂ぶらないように離れようと、マグカップをよく見ずに手に取るうとした。

そのとき、手の甲でマグカップを勢いよく倒してしまった。熱いコーヒーが美穂に少しかかった。

「あつっ」

ハツとして秀也は、振り返ると美穂のガウンの胸元から下にかけて、茶色く染みがついていた。

「すみませんっ！」秀也は、自分のバスタオルを咄嗟に美穂の胸元当たりに当ててしまう。

「あつ」かすかな声をあげた美穂の胸元に秀也は手を抑えつけていた。

まるで胸をつかむ格好に。あまりの柔らかさとこの状況で頭が真っ白になった秀也は、一瞬間まってしまっていた。

二人とも視線を放すことができなくなった。

どちらからともなく・・・口づけを交わしていた。

理由もなく。ただ求めるままに。

無言で互いの唇をついばみながら、もどかしく互いの気持ちを確かめていた。

二人で口づけを交わしながら歩いて横向きにベッドに倒れこんだ。

倒れこむと同時にウエストできつく縛ったガウンの上の部分がはだけ、片方だけ乳房が露わになった。

完全に興奮しきって隆起していて、秀也の細い指先が、少し触れるだけで

「っっはあっふん」と艶めかしい声が漏れた。

早すぎる自分の反応に驚いた美穂は、気になっていた相手だとこん

なに興奮するのかと思いつた瞬間でもあった。

「見ないで……。」かすれた喘ぎ声と共に顔を片手で覆った。

美穂の手首を握り、ベッドに押さえつけ、胸だけガウンから露わにした格好で

秀也は、舌先乳首を転がし、唇で強めに噛んだ。

「っあつは・あうん」執拗に片手で優しくいじりながら唇で乳房を愛撫していた。

美穂の太ももは、硬さが増した秀也自身が、愛撫の度に押しつけられ、奥から湧き上がってくる熱さに何も考えられなくなっていた。

「チーフっ……チーフっ」

「美穂って呼んで……。」

「ミホ……さん……。」耳元に息がかかり、美穂の全身にゾクツと電気が走った。

自分ばかり気持ちよくなっていた美穂は、反転して、秀也を組み敷く格好になった。

秀也の片手首を押さえ

「しゅうって呼んでいい？」と直視した。「はい。」

秀也の耳元で「しゅう……。」と囁き、片手で秀也の鎖骨から乳首にかけて手を滑らせた。

美穂の左の内腿の柔らかい部分で秀也自身を優しくガウンの上から撫でながら……

これまで、秀也は、厳格な家庭で育ち、奥手で付き合っている女性とも手をつないだりキス程度でその先までは経験がなかった。

大学も自宅から通いそのまま就職したため、27歳でも実は体の経験は初めてだった。

理系の彼は、ほとんど男ばかりの環境だったせいだろうか？日常で

それほど強い性欲を感じたことがなく、自慰で十分満足していたのだ。しかし、生身の女性を至近距離で見たのは初めて近くに、こんなに興奮したのも生まれて初めてだった。

美穂は、秀也を組み敷いたままキスをし、秀也のガウンの前をめくり秀也自身を直下で撫で始めた。

「ッウツハアツ。ミ・ホ・さん。ダツ」

秀也の先端は、艶めかしいほど赤ピンク色で透明のほとばしりが先端をてらてらと光らせていた。

「私の手がしゅつのでベタベタ」熱い吐息を秀也の耳元に吹きかけた。

「ミ・ホ・さ・ッウツハアツ。ヤメッ」

興奮しながらも美穂は、秀也が快感に対して余裕がないので、初めてなのではないかと気付いた。

少しサディスティックな気持ちで、力なく美穂の左手の動きを阻止しようとする秀也の右手を頭上にもってきて、手の自由を奪いわきの下あたりに口づけ吸いついた。

秀也を扱っている左手を早めた。

「ミ・ホ・さ・ッウツハアツ。ヤメッ・ヤツ・アツ・アツ・アツ」

白いほとばしりが勢いよくビュッビュッとほとばしった。

「はあっ。はあっ。」と息使いだけが聞こえる。

秀也の上に重なり、胸の上で息使いを聞いていた。

かわいい。体は大きい、何もほとんど知らない。そんな余韻に美穂は、浸っていた。

秀也が体を起こしガウンで出したものを拭い、無言で美穂に覆いかぶさって、口づけしてきた。

胸を揉みながら、ウエストのガウンの紐を解き、露わになった下腹部を撫で始めた。

美穂の敏感な先端に指先が辿りつくときと驚いたように手が離れた。大変な量の蜜が溢れていたからだ。

「しゅうのせいよ。あなたが・・・いやらしいから」

秀也は、さっきの攻め立てられた自分の姿を思い浮かべかあとなった。

サディステイクな気持ちになりクリトリスを強めにこすり始めた。

「あつ・・・は・あふうん」「いやつあ。そんな強くしないで」

秀也は、心配そうにはっとして手を弱めた。

「いやつ・・・そうじゃない・・・よ。」「いやってことはその反対・・・」

かああつと赤くなつて秀也は、手をまた動かし始めた。

美穂の花芯にたどりつくとき、柔らかいのに意外にもきつく締まっていたが、思い切つてそこに中指を差し込んでみた。

「ひゃあつ。あつ。」花芯の内壁は、凄くヒダヒダになっていてギョツとしまっていた。

中指の腹にあたる部分は突起状のぶつぶつがあり、気になつてそこを押してみると

「いやつ・・・はあつ・・・」美穂が尋常ではない乱れ方をした。

美穂にとっては、完璧なGスポットだったのだ。

秀也は、ソコを逃すまいと腰を強く抱き、攻め立てた。

「はあうん・・・いやつ・・・ひゃあつ。おかしくなるはあつ・・・はあつ・・・」

秀也自身も隆起しきつてしまっていた。

「きて。。しゅう・・・や」「ミホさん・・・」「さつと上のりになり花芯の中心に先端を当てて

一気に押し込んだ。

美穂は、「あっ・・・はあうん」と大きく喘いだ。信じられない位の熱さに秀也自身びっくりしていた。

先ほどの内壁の突起が、腰をグラインドさせるたびに自身にまとわりつきぶつぶつした刺激を与える。

先ほど、達していなければ、数回で逝ってしまったかもしれない。

花芯の上壁を亀頭でえぐるようにグラインドさせ、奥に思い切り押し込むと、美穂が、声を殺しながら

狂ったように喘ぐのを見て、攻め立てた・・・

ベッドの上では、低い呻き声と声を殺した喘ぎ声、ギシギシときしむ音が激しさを増した。

「ひゃあん。」声にならない声を美穂が発した。

その瞬間、花芯から秀也自身を抜き出し美穂の白い腹に精を放った。

ぐったりと二人は重なり・・・

息使だけが部屋に聞こえていた。

ざわめき(前書き)

一夜かぎりの出来事として美穂は、秀也と何事もなかったように日常に戻る。

そんな矢先、美穂は、秀也への気持ちに気づかされて愕然とする。

おわめき

「おはようございます。」

美穂の下でアシスタントをしている仁美が軽く会釈する。

午後一のプレゼン資料のチェックをしていた美穂は、「おはよ」とちらりと仁美に目をやった。

その先に、秀也が自席に座っていることに気付く。

あの夜の出来事から土日をはさんで3日。以来、彼の姿をみるとまだ緊張が走る。

おかげで、鼻からそっと息を抜くような溜息で緊張をほぐす癖がついてしまった。

ただ、完全に二人ともポーカーフフェイスで何事もなかったかのように問題なく過ごしている。

そんな日々が、2週間続いてほとんど、自然にふるまえるようになってきた。

彼は、まだ28歳だし、まだまだ将来があるんだからさっさと忘れよう。忘れよう。

可愛い彼女ができて、いや、今もっているかもしれないし・・・その子と幸せな人生を歩めばいいんだ。そうするべきだ！私だって、主人を大切にしなきゃ。なんてことない。ちよっと発情しただけ。

不倫なんてまっぴらよ。自分の性分にも合わないし！

こんなことを気付けば、朝・昼・夜 ずっと言い聞かせている。

特に夜顔を洗った時、自分と彼の年齢差に気づかされる時、より強くそう思っただった。

実際主人のことは、とつても矛盾しているが大切に思っている。ただ、恋しているときのような”トキメキ”がないだけだ。だから、あんな衝撃的体験をするときらめいてみえるだけなのだ。

簡単に発情してしまったのも、自分自身理解ができなかった。そんなに性欲をこれまで感じたことがなかったからだ。

実際夜の方は、互いにたんぱくで、ここ数年一緒に寝ることはあっても軽いスキンシップだけでまったくしていなかった。年齢的なものもあるのだろうか・・・。

とりあえず、美穂は、キレイに気持ちを整理したつもりでいた。

「チーフ！」

終電間際の駅までの道で突然、部下の仁美が、後ろから駆け寄ってきた。

「あつ仁美ちゃん。先帰らなかった？」

「近くで友達と飲んでたんです。彼女地下鉄で私JRだから。」

「合コン設定しろってうるさくて……。」

「そうなんだ。」

「チーフ？マーケの佐藤さんって彼女いるんですかね？」

「へえっ??？」「衝撃を悟られないように答えた。

どきつとした。なぜここで秀也の名前がでてくるのだ？
いや過剰反応しているのは自分か？

「どうせ設定するなら、彼呼びたいんです私。」

「そっそうなんだ……ゴメン知らない。」

「そっかぁ……明日聞いてみようかな。」

「そうねえ。ランチでも行って聞いてみたら。」

何言ってるんだ私。いやっ対応として正しいだろう私。
2つの交錯する想いを胸に伝えていた。

翌日……。

帰る間際、エレベータ前で秀也は、仁美に呼び止められた。

「佐藤さん！突然すいません。あの……合コンとかOKな感じ
ですかぁ？友達に設定しろってせがまれてて……。お友達とか誘
つてくれるとたすかります。お願いします！」

秀也は、仁美の突撃に少し驚きながらも「あつわからないけど、誘ってみます」と言った。

美穂は、化粧室から出たところでそのやりとりに偶然遭遇した。愕然としていた。

「嫌だ!」と思う自分と「それでいんだ。」と思う自分に・・・。

そのあと、仕事は全然進まなかった。

気持ちを整理する為に、誰にも教えてないブログにその気持ちを吐き出した。

ブログの最後の行には、こんなことが書かれていた。

* * * * *

7 / 2 2 2 3 : 0 0

・
・
・

あなたを縛りたくないけど、縛りたい自分がある。

できれば、社内の人とは、うまくいかないでほしい。

ただ、好きなだけ。ただ、好きなだけ。

主人のことを大切に思っているのに、その気持ちも同時にある。

あなたの幸せを願っているけど、それは私の見えないところで叶えてほしい。

もう2度とあなたとはどうにかなるつもりはないのだけど・・・

こんな都合のいい考え方であなたと付き合えるはずもない。

あなたが私を求めてくれるはずなんてない。

* * * * *

息苦しい気持ちで美穂は、自分をなだめるようにPCの電源を落とした。

呆然としながら、電車の中で

Franz Liszt の Consolations を繰り返し聞いていた。

<http://youtu.be/4a0DheeUZjo>

Lisztは天才ピアニストとして華やかな人生を送ったと思われるが、

両想いだった令嬢の両親に引き裂かれる形で、令嬢が別の人と結婚してしまい、

絶望して人生を送っていたことは、あまり知られていない。

そんな彼の生い立ちにどこか共感する気持ちが美穂にはあった。

なんて、自分は、愚かな女なのか・・・どうしようもない・・・
ましてや、1度衝動的に関係を持っただけ、彼に、気持ちなんてあるわけがない・・・。

彼が、私を引き寄せてくれるわけもない。

仕事でも感じたことのないやるせなさがこみあげ、途方に暮れていた。

私だめかもしれない。

いましめ

最近、美穂は、一人でランチを取るようになっていた。

同僚との何気ない会話さえ苦痛を感じるようになっていた。

ランチメニューもしつかり見ずに一番上を指さしてオーダーを済ませる。

秀也が部下と合コンに行くを知ってからどうにもならないこの気持ちなだめるしか術がないことに落ち込んでいた。

秀也とどうなりたいなど望める立場でもないし、主人を傷付けたり裏切ったりするつもりでも無いことが一番矛盾しているが好きなこととはしようがない。

実際彼と淫らな関係をもってしまったが、それを繰り返すというより、悩み事や愚痴なんかきいてあげて楽しく過ごしたい気持ちのほう膨らんでいるのだ。

仕事を続けてきた人間として、働いていない女子とは違う面で親友的な立場になることは出来ないだろうか？そんなことをとめどなく考えていた。

彼の笑顔を見れるだけで・・・

36にもなつていまどきの高校生でも思わないようなそんな気持ちになつていた。

1度きりの浮気と思うことで、不倫という自分が一番軽蔑すること
にしない最後の気持ちの砦になっているのかもしれない。

大人になると責任というしがらみがある分、掛け値なしの自然に好
きという気持ちの大切さが身に染みてわかる。

なぜ秀也とこんなふうになってしまったんだろう。

どうにもならないきもちを少し冷めた食後のコーヒードで流し込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7766y/>

カタチをもたない心

2011年11月24日00時49分発行